新見公立大学紀要　第38巻2号
pp. 95－99, 2018

研究ノート

野外彫刻を対象とした表現における鑑賞について（２）

－広島市「嵐の中の母子像」の調査から－

岡本　直行[1)]*

１）新見公立短期大学幼児教育学科

（2017年12月20日受理）

鑑賞教育にふさわしい野外彫刻の在り方について具体的に考察するために、広島市平和記念公園の本郷新作「嵐の中の母子像」の設置状況や作品の構築について調査した。作品が設置された空間は作品鑑賞に適したものであり、点・線・円のどの鑑賞法も可能であった。360度どの方向からも鑑賞できる環境は非常に優れた作品設置の在り方と考えられる。

作品は存在感ある量感や量塊などの要素を駆使して制作されており、作品のムーブマンが幾重にも重なり充実感、重量感のある作品として完成され、作品の心象と環境のかかわりは極度に調和したものと考えられる。また、作品の各部位はデフォルメを加え制作されており、視点から距離のある部位ほど小さく見える遠近感による歪みを解消する技法が駆使され、高い台座に設置されることを意識して制作された作品であると考える。

この様に作品の心象や技法、作品の設置方法や空間を総合的に考慮して作り上げられたパブリックアートは、鑑賞者に大きな感動や心地よさなどを与える存在となるものであり、作品鑑賞の優れた教材となる。

（キーワード）彫刻、鑑賞教育、美術

Ⅰ．はじめに

都市空間には彫刻やモニュメントといったパブリックアートが多数存在し、設置された空間に新たな三次元の空間を発生させ各都市の特徴を作り上げている。街の通りに存在する彫刻は行き交う人々に語り掛け、人々の心を和ませる存在、また、美術教育において重視される鑑賞教育の教材となる可能性を秘めている。すなわち、環境に調和する彫刻や造形作品を設置することは、都市に芸術的要素のある美的空間を創造するとともに、人々に常に作品と触れあい親しむ環境を整えることになる。そのような理想の環境は人々の感性や表現を向上させる力となるであろう。

筆者は、「表現の鑑賞における立体作品のあり方（１）―パブリックアートと空間の関わりから―」において、彫刻を取り入れた都市計画、いわゆる“彫刻のある街づくり”について研究し、歴史的変遷や野外彫刻の設置状況や課題、そして、彫刻が都市空間の構成要素や鑑賞教育の教材となりうることについて述べた。しかし、彫刻の設置環境に問題があることやそれが放置されたままである状況についても触れ、芸術性の高い環境、また、鑑賞教育のよい教材となるには、街づくりや彫刻に関する優れた考察や環境改善が重要であることも言及した。そして、鑑賞教育にふさわしい野外彫刻の在り方をより具体的に研究するために、生まれ故郷である広島市を対象として野外彫刻の設置状況について調査している。

本研究では、調査した彫刻125点の中から、鑑賞教育の教材としてふさわしいと考えられる、広島市平和記念公園に本郷新作「嵐の中の母子像」を取り上げ、理想的な野外彫刻の設置方法や作品に秘められた芸術的要素、作品と環境のかかわりについて考察し、鑑賞教育の教材となる彫刻のあり方を見出すことを目的とする。

Ⅱ．嵐の中の母子像設置の経緯

広島市は第2次世界大戦中、アメリカ軍の原子爆弾投下によって破滅的に破壊された。戦後、大規模な都市計画によって現在の姿に復興されているが、この彫刻が設置されている広島平和公園には、原爆ドームや原爆資料館、原爆死没者慰霊碑、戦争と平和に関する数々の彫刻などが存在し、戦争の無残さと平和を訴える観光地となっている。「嵐の中の母子像」が設置されている場所は平和公園内にあり、爆心地から南南西に約470m下ったところである。

この場所は広島平和記念公園の南側に位置し、広島平和記念資料館を背景とした空間を構成している。緑と水の美しい環境は平和的な空間を連想させる。しかし、腰を低く落とし一人の子どもを自分の身体と腕で包み込むように抱きかかえ、また、背中にしがみつく子どもを風下になるように自身の進退を盾にして懸命に耐える母親の姿は、こ

*連絡先：岡本直行　新見公立短期大学幼児教育学科　718-8585　新見市西方1263-2

の地がかつて戦慄の中心であったことを忘れさせることがない。襲いかかる業苦に耐え、悲しみを乗り越えていく母親の強い愛情を示す像に市民の平和への願いが託されている。

作品の作者は、彫刻の社会性、公共性を重要視し、平和を希求した生命感あふれる人体像を制作し続けた本郷新である。この作品について本郷新記念札幌彫刻美術館のホームページにて、本郷新の言葉が紹介されている。「この作品のモチーフは、広島の惨害です。胸に乳飲み子を抱きかかえ、背にもう一人子どもを背負って、立ち上がろうとする母子の必死の姿は、まさに突進の形です。普通母子像は、暖かい愛情を表現するものですが、「嵐の中の母子像」は、いつ離れ離れになるかも知れぬという不安と、非常な事態の中での愛情の危機、もしくは極限の状態です。この、とことんまで生きようとする母子の像を通じて人間の生命の尊厳を象徴づけたつもりです。だから単なる母子像というより、母子二代にわたる悲しみ、二つの世代に横たわる悲劇の記念碑というわけです。」[1)]

1959（昭和34）年、第5回原水爆禁止世界大会が開かれた折、原水爆禁止日本協議会から当時の浜井広島市長に、原水爆禁止運動推進への感謝のしるしとして、この像の原型となった石こう像が贈られた。その後、大会の成功のために尽力した広島市婦人会連合会が「平和記念公園への設置」を呼びかけ、ブロンズ像にするための募金活動を行い建立され、広島市に寄贈された。

Ⅲ．嵐の中の母子像に込められた彫刻の要素

170㎝の高さの台座に置かれた彫刻は、広大な空間を与えられている（図１）。彫刻の設置を目的として用意された環境は、半径10mの円形の空間である。さらに、それを中心とした半径80mの円形の空間には、作品鑑賞の妨げとなる建築物が見当たらない（図２）。広島市内でこれだけの空間を支配する彫刻はほかに存在しない。広大な環境で鑑賞者は作品を遠くから眺め、近くに寄って細部を確認す

図１　作品の設置空間

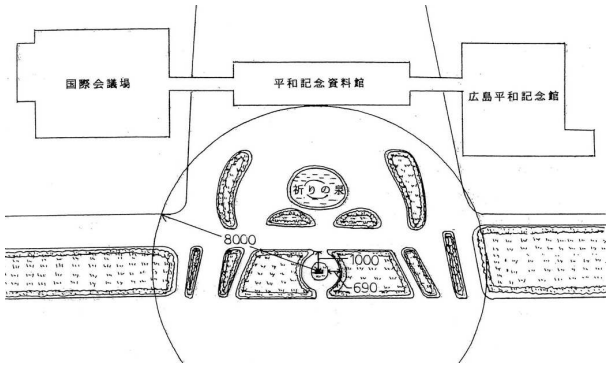

図２　作品の設置空間平面図（単位はcm）
※これは筆者が測定したものである

るという、360度どの位置からでも鑑賞できる環境が成立しており、この環境構成が作品の価値を一層高めていると考えられる。

半径80mであれば、美術手帳増刊号アートウォッチングで紹介され、作品の鑑賞方法の基本となった、点の視線による観賞法、線の視線による観賞法、円の視線視線による観賞法のどの方法であっても鑑賞可能な空間を形成している。これは、近年、造形表現や美術教育において重視されている鑑賞教育にとっても有用である。

これだけの空間を支配するとなると、設置される彫刻には空間に対抗するだけの力強さとその力を発揮させるムーブマン（動勢）、マッス（量塊）といった要素が必要となる。この作品は周囲の空気を一点に集中させる「求心性」とそれを反発して周囲の空間に訴えかけ支配する「開放性」といった芸術的力を持っており、独自の流れを創り出し存在感を与えるのである。

この像の詳細を見てみると、岩のような塊を考慮した構築に基づき制作されていると考えられる。地面を力強く踏みしめることによって誕生した流れは、人体の筋肉の構造に従い螺旋状の動きを持ちながら脚を上昇していく。右足から生まれた流れは、胴部を通過し右から右手に向けて子どもを抱きかかえる腕に伝わる。目に見える形に表現された流れは一旦力強い大きな手で受け止められ、頭部に繋がっていく。そして力強い腕の流れは、子をしっかりと抱く親の愛情の強さを表現するとともに、身体を包み込むような大きな流れとなり、重厚感を生みだしていると考えられる。

左足から出発するもう一方の流れは、踵から膝まで大地と並行の流れを形成し、膝から腰に勢いよく進んだ後、上下に回転する流れに変化している。この流れは左肩に辿り着き、一旦後方の子どもを包み込む左腕の流れとなる。子どもを包み込んだ流れは、やはり頭部への流れとなって右足からの流れと融合される。融合された流れは、像を前進しようとする動勢となっていると考えられる。

しかし、この広大な環境における彫刻の動勢は、前進す

る動きだけでは成立しない。仮にその動きだけであったならば、空間の流れは非常に単調なものとなり、重みのある題材を訴える力強さや作者の心象は軽いものとなってしまうだろう。その対策として前進しようとする動勢を後方に引き戻す流れ、すなわち、後方の空間支配にも配慮されていると考える。その流れを生み出す構築要素として、この像の重心が挙げられるであろう。前方に倒れこむような身体は右足によって支えられ、身体の重量が足を伝い、重心は垂直に地面に落ちる。

さらに子どもを抱きかかえることによって、鑑賞者に視覚的重量感を感じさせる。この重量感は、垂直に落ちる重量感をさらに重く、確実なものにする働きを持っていると考えられる。この点については抱かれている子どもを消してみると一目瞭然である（図３）。さらに真直ぐ後方へ伸ばされた手の指先を見ると、人差し指だけが後方を指指していることに気付く。この指によって、腕から子どもを包み込み頭部に上る流れの分散が起こり、後方の空間への流れも構成しているといえるのである。

そして、母親の腰部にしがみつく子どもの像が重要な役割を果たしていると考えられる。この作品の後方への動勢を最も強くし、作品に存在感を与えているのは、後方の子どもの像であるといってもよい。母親の下半身ほどの量を持つ子どもが、その重量感によって前進する像を後方に引いているからである。この子どもの重量感は、後方への力となるだけでなく、作品全体を傾くことなく立たせている。後方の子どもの像が存在しなかったならば、これほどの量感ある作品にはなり得ない（図４）。

この作品は、上下左右に螺旋状の動きを作りながら身体を包み込む流れによって、身体全体の量を綴じ込め、量塊としての大きな存在感を生み出している。そして、2人の子どもは子を守ろうとする母親の存在の大きさを感じさせるためだけに存在するのでなく、この地に置かれる主題の意義に重みを与えるために、そして、この像に岩のような塊としての力強さを与え空間を支配する動勢を形成する要素となるために、計算され制作されたものなのである。

図３

図４

Ⅳ．作品の設置に関する考察

また、この彫刻は設置状況についても考慮されたと考えられる。作品の台座は170cmの高さがある。作品本体の高さは140cmであり、台座を含めると310cmの高さを持つことになる。彫刻尾は高い場所に置かれると遠近感によって比例、律動といった彫刻の要素に視覚的な狂いが生じ小さく見える、歪んで見える、均衡が崩れて見えるといった傾向を持つ。そのような事態が予測される場合、比例を保ちながらデフォルメ（変形）を加え、視覚的なバランスを保ち強さを引き出すことが多い。日本の仏像やミケランジェロ作ダビデ像などの頭部や手足が大きく作られているのもそのためといわれている。

その点について考察を行うために、この像の各部分の長さ（大きさ）を計測してみることにした。結果は、足の長さは40cm、踵から膝までは67cm、膝から腰までは59cm、腰から鎖骨までは70cm、頸は10cm、頭は35cmであり、腕は110cm、手は30cmであった（図５）。

人体の制作には、ギリシャ時代に考案された人物像の理想的な人体比例である“カノン”が用いられることが多い。C・H・シュトラッツ著『女体の美』によると「ポリュクレ

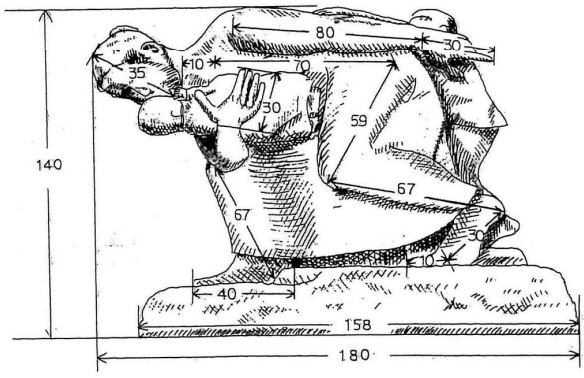

図５　各部分の長さ（単位はcm）
※これは筆者が測定したものである

イトスのカノンは、身長を1とした場合、顔は10分の1、頭は8分の1、頭と頸を合わせたものは6分の1であり、足の長さに等しい。また、顔は頸から鼻の下縁まで、鼻の下縁から鼻根まで、および鼻根から頭の毛の生え際まで、の三つの等しい部分に分かれている」[2] のである。

また、同署にはポリュクレイトスのカノンを基本としたルドルフ・マルチンの基礎的な人体測定図も紹介されており、それによると、掌の長さは9分の1、足の長さは7分の1、腕の長さは頭の長さの3倍、足の長さは頭の長さの4倍、肩幅の間隔は頭の2倍である[3]とされている。嵐の中の母子像の計測によって算出された身長は241㎝である。これをもとにカノンによって各部分の長さを算出してみた。結果は、足の長さは34.4㎝、踵から膝まで、また膝から腰までは各60.2㎝、腰から鎖骨までは72.3㎝、頭は30.1㎝そして腕は90.3㎝、手は26.8㎝である。この結果から、カノンによる標準的比例よりも、頭、足、腕、手が大きく作られていることが分かる。さらに、腕の太さは頸の太さとほぼ同じである。

手が大きく作られているのは、子どもをしっかりと受け止める意味を強調することにもつながるが、腕が太く、長く作られていることと併せて考えると、310㎝という、この像で最も高い位置に存在する部位であること、大きく作られた手や足などとの視覚的釣り合いを取ることを目的に、デフォルメされたのは明らかと考えられる。つまり、この彫刻が170㎝の台座に置かれ、最高部位が310㎝に達することを見越し、遠近感による違和感を解消するためにデフォルメが必要であることや彫刻の占める空間支配の環境を制作前から考慮し、綿密に計算された作品なのである。

彫刻に込められた巧みな技術や要素によって、作品は環境に緊張感を与え、広大な空間に設置されても負けることのない存在感を備えられる。これらの点から、「嵐の中の母子像」が広島という地への想いを込められた彫刻であること、心象と量の構築を考慮した環境空間の設置計画が進められたこと、つまり、彫刻を核に据えた街づくりが実践された場所であることが理解できる。

この様に彫刻と空間の両方を考慮した環境計画は理想の街づくりと呼べるものであり、お互いを高めあう存在となりうる。背景となる平和記念資料館が、まるで遠方の地平線のような効果を生じさせ、彫刻はその上に広がる空に姿を映し出すことになる。背景の建築物まで彫刻が占める環境の一部として取り込むように作品の正面を南側に向けこの高さの台座に設置した設置者は優れた環境を構成したと考えられる。

Ⅴ．まとめ

鑑賞教育にふさわしい野外彫刻の在り方について考察するために、広島市を対象として野外彫刻の設置状況について調査した。筆者が確認した広島市内に設置された彫刻125点の中から、鑑賞教育の教材としふさわしいと考えられる、広島市平和記念公園に設置された本郷新作「嵐の中の母子像」を取り上げ、その設置状況を調査した。

嵐の中の母子像が支配する空間は半径10mに渡り、作品鑑賞の妨げとなるものは存在しなかった。作品の鑑賞は、点・線・円のどの鑑賞法も可能である。彫刻は360度どの方向からも鑑賞できることが望ましいことから、この調査結果は非常に優れた作品設置の在り方と考えられる。

作品を彫刻の構築方法や要素の観点から考察すると、与えられた広大な空間を支配する力を備えた存在感ある量感や量塊などの要素を駆使して制作された作品であり、作品の中に存在するムーブマンが幾重にも重なり充実感、重量感のある作品として完成していた。また、体の各部位の構築によって、子どもを守る母親の力強さや存在感までも表現されており、作品に込められた心象と環境のかかわりは極度に調和したものと考えられる。第2次世界大戦の戦慄を潜り抜けた広の島地にあるべき優れた作品であり、鑑賞教育に適した作品設置の在り方と考えられる。

また、作品の各部位の寸法を計測したところ、彫刻の理想的な人体比例（カノン）にデフォルメを加えた寸法で制作されていることが分かった。これは、作品の鑑賞時に視点から遠い部位ほど小さく見える、という遠近感による歪みを解消するために用いられる技法であり、この点からも、高い台座に設置されることを意識して制作された作品であると考える。

この様に作品の心象や技法、作品の設置方法や空間を総合的に考慮して作り上げられたパブリックアートは、鑑賞者に大きな感動や心地よさなどを与える存在となるものであり、作品鑑賞の優れた教材であると考える。

注

注１）　本郷新記念札幌彫刻美術館HP，嵐の中の母子像＜http://www.hongoshin-smos.jp/sculpture/arashinonakanoboshizo.html＞（アクセス日/2017.10.5）

注２）C・H・Strats；女体の美，刀江書院，1994，pp.70

注３）C・H・Strats；女体の美，刀江書院，1994，pp.555

文献

１）C・H・Strats；女体の美，刀江書院，1994

２）本郷新；彫刻の美，中央公論美術出版，1943

３）本郷新；本郷新－彫刻集，本郷新彫刻集刊行委員会，1981

４）本郷新；本郷新彫刻展－1984，ニュースカルプチュアルセンター，1984

５）高木茂登；ひろしま水と緑と彫刻，広島文庫，1984

6）井上みどり；本郷新作品集，本郷新記念 札幌彫刻美術
館，2004